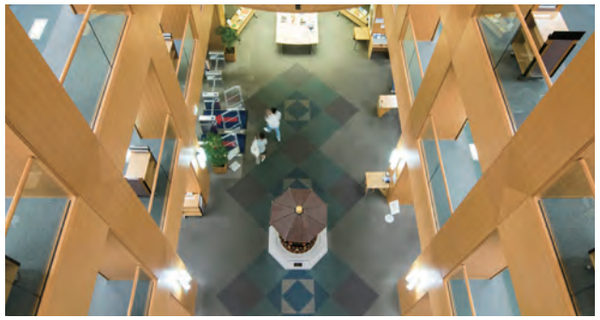
常照

佛教大学附属図書館報

2018

NO.65



佛教大学附属図書館

ISSN 0388-6700

アメリカ

附属図書館長・仏教学部教授
松田 和信

アメリカといっても、サイモンとガーファンクルの歌の話である。二人の歌から一曲挙げろと言われたら、私なら「アメリカ」を選ぶ。一九六八年のアルバム「ブックエンド」に入っている人の一生を歌った組曲の一曲である。一体何度聴いただろう。歌詞も音符も今なおすべて頭の中に残っている。六〇年代後半、アメリカの若者の喪失感を歌った曲だと言われている。歌詞に描かれるカップルは、ファストフードチェーンの「ミセスワーグナー」でパイを買い、サギノーを出て、グレイハウンドバスに乗ってピッツバーグからニューヨークに近いニュージャージーターンパイクまでやって来る。二人ではしゃいだ後、バスの中で眠っている彼女を横に男は言いようのない不安感に捕らわれる。「みんなアメリカを探しにやって来た」というリフレインで、それがその時代の若者に共通する不安感・喪失感であることが暗示される。これはアメリカを遠く離れた高校生の私にも共有できる感覚であったし、還暦をとっくに過ぎた今でもそう変わるわけではない。当時は知らなかったが、ポピュラー音楽の常識に反して、この曲は歌詞が全く韻を踏んでいないことでも有名らしい。

なぜこんな昔話を書いたかと言うと、今年の冬のことである。たまたま見たオーディオ誌の中で、ある評論家が、マスターテープそのままという触れ込みの、アメリカの会社が二〇年前に作った「ブックエンド」の限定版CDを取り上げて「この音を聴いたことのない人はただ不運というほかはない」と書いていたからである。そのCDが出ていることは知っていたが、果たしてそんなに違うのか、いささか懐疑的であった。しかし好きな曲の入るアルバムをそこまで言われては買わざるを得ない。新品はとっくの昔に販売完了である。探して、ロンドンの中古店から取り寄せた。四万円であった。びっくりした。LPレコード時代の音は忘れているが、手元のCDのいずれとも雰囲気、奥行き感がまるで違う。一体私は何を聴いてきたのだろう。昨年入手した英コード社のDA変換器が本領発揮しているのかもしれないが、それにしてもここまで違うとは。半世紀を経て、私はやっとポール・サイモンの意図した音に触れたのかも知れない。

ところで、サイモンはアメリカという名前の入る曲を二曲作っている。アメリカの過去と未来を歌った「アメリカンチューン」も私の好きな曲である。第二の国歌だと言う人も大勢いるらしい。代表曲のように言われる「明日に架ける橋」はメロディーも歌詞も私の趣味ではない。何かが違う。

最後にこれは書いておくべきであろう。本学図書館は数千点の音楽・映像資料も所蔵している。勉強の本ばかりでなく、こちらも是非利用していただきたい。私も三〇秒ほど出演しているNHK「文明の道」シリーズの第三集「ガンダーラ・仏教飛翔の地」などいかがであろうか。

常照
佛教大学附属図書館報
2018 NO.65

目次

アメリカ
附属図書館長・仏教学部教授　松田 和信　1

Interview
多読用ライブラリーを活用して、英語力を高めよう!
文学部英米学科教授　松本 真治　2

こんなん聴いてたんや、観てたんや —図書館の視聴覚資料—
文学部日本文学科教授　坂井 健　6

佛教大学附属図書館の浄土教関係資料 —先人の負託に応える
仏教学部仏教学科教授　本庄 良文　10

『職業としての学問』の《原風景》を求めて
社会学部公共政策学科教授　野﨑 敏郎　14

所蔵資料紹介
丹波国桑田郡灰屋村文書
図書館専門職員　尾下 仁美　18

佛教大学附属図書館の事業活動報告　2017～2018年度前半期　24

佛教大学附属図書館の沿革と「成徳常照館」の由来　25

Interview

多読用ライブラリーを活用して、英語力を高めよう！

文学部英米学科教授　松本 真治

英語のリーディング力を高めるには「多読」が最も効果的であると言われています。図書館1階の語学教材コーナーには、TOEICやTOEFLなどのテスト対策の学習教材とともに、気軽に読めるさまざまな多読用の洋書が排架されています。

また、オンラインで利用できる学術情報データベースには、文学のカテゴリーに平易な英語で世界の文学作品を楽しめる「電子書籍多読リーダー」が新たに収録されました。

多読に関する訳書がある英米学科の松本真治教授に、英語学習における多読の効果や図書館が整備を進めている多読用ライブラリーの利用法について話を伺いました。

「多読」とはどのような学習方法でどのような効果が期待できるのでしょうか？

「多読」とは、文字どおり本をたくさん読む学習法です。興味のある英語の本を自分のペースで楽しみながらたくさん読むだけ。辞書は引かなくてもいい。わからないところは飛ばしても構わない。単語や英文の暗記方式とは一線を画する学習法です。

私が翻訳の一部を担当した『多読で学ぶ英語―楽しいリーディングへの招待』（松柏社・2006年刊）は、ハワイ大学の先生が書かれた多読プログラムを実践するための解説書ですが、「多読」とはもともと南カリフォルニア大学名誉教授のスティーブン・クラッシェン博士がその重要性を唱えて注目されるようになった学習法です。クラッシェン博士は、第二言語の習得研究において最も有名な言語学者の一人で、言語習得に関する5つの有名な仮説とともにリーディングにおける多読の重要性を訴えました。その中の一つが「インプット仮説」で、博士は第二言語習得においてこれが最も重要だと主張しています。

やさしい本をたくさん読むことが多読の基本的な方法ですが、クラッシェン博士が唱える多読とは、現在の自分の英語レベルより僅かに高いレベルの本を読みながら理解可能な英語を繰り返しインプットしていくという方法です。博士は現在の言語習得レベルを「i」と表現し、それよりも僅かに高いレベルを「i＋1」と表現しました。その「i＋1」のものをたくさん読むことが第二言語習得における重要なポイントであり、「多読は言語を伸ばす良い方法ではなく、唯一の方法」だとも訴えています。

『多読で学ぶ英語ー楽しいリーディングへの招待』
松柏社・2006 年刊

「i＋1」のレベルの本であるかどうかどのように調べればいいのでしょうか？

多読用の洋書に表示されているレベルを参考にする方法や、多読用の洋書を発行している出版社ではレベルチェックのサイトを設けているところもありますので、それで判定するといいでしょう。大雑把に言えば、一般的にはペーパーバックサイズの本の1ページにわからない単語が2～3語で、辞書を引かなくても楽に読めて、わからない単語も前後の関係からある程度推測できるような本が、その人にとっての「i＋1」のレベルと言っていいでしょう。わからない単語が一つもないような簡単な本ばかり読んでいても多読の効果は上がりません。逆に1ページの中にわからない単語が10も20もあり、読解に詰まってしまうような本は、「i＋1」のレベルを超えていますので、その時点の多読の対象としては適していません。

多読で読む本は、どのようなジャンルのものがおすすめですか？

自分が楽しめるものであれば、どのようなジャンルの本でも構いません。分厚い本である必要もありません。

多読では、とにかく楽しんで読める本であることが重要です。クラッシェン博士は、言語の「習得」と「学習」は別のものであると言っています。「中学のときからずっと英語を勉強してきたけれど身につかなかった」というのは、単語や文法を暗記したり、辞書を引きながら読解するという「学習」をしただけなんです。強いられて学習しても、なかなか英語は身につきません。何でもそうですが、自分からやりたいと思ってやったこと、楽しみながらやったことの方が、早く身につきま

図書館１階語学教材コーナーに排架している多読教材等

- Penguin Readers
- Macmillan Readers
- Cambridge English Readers
- Cambridge Experience Readers
- Cambridge Discovery Education Interractive Readers
- 英語版 マジック・ツリーハウス
- 英語版 やさしく読む伝記セット
- DK バイオグラフィー・セット
- 英語で読む世界の文学全集 A セット
- 英語で読む世界の文学全集 B セット
- 英語で読む世界の文学全集 C セット
- 英語で読む世界の文学全集 D セット
- ハリー・ポッター セット
- 英語版 指輪物語
- 英語版 ナルニア国物語
- 英語で読む日本文学（古典・近代作家編）
- 英語で読む日本文学（現代作家編）
- DK バイリンガル・ビジュアル辞典
- 英語版 DK 教養大図鑑セット
- DK アイウィットネス図鑑セット　etc.

す。英語も同じです。楽しみながら英語に親しむことが、「習得」の大きなポイントです。

多読では、英文をていねいに訳しながら読み進める必要はありません。辞書を使って単語の意味を調べるようなこともしなくていいのです。楽しんで読める「i＋1」のレベルのものを、大意を理解しながら、とにかくたくさん読むことです。興味の赴くままに多読を進めることで、無意識のうちに「i＋1」のレベルが上がり、自然と英語の「習得」へとつながっていくのです。

「楽しみながら」というのが多読や英語習得のポイントですね。

英語が苦手な人というのは、中学や高校で受けてきた授業が原因で苦手意識を引きずっている場合があります。私は英語の教科教育法の授業も担当していますが、「英語の授業は体育の授業に似ている」という話を学生たちにすることがあります。中学・高校の英語は、授業が進むにつれてどんどん難しくなります。体育の苦手な子が実技の課題をこなせなくていつまでも体育嫌いが克服できないことがあるように、英語の場合も授業のスピードに対応できなくて一度つまづいてしまうと、英語への苦手意識だけがいつまでたっても払拭できないことがあります。英語は実技です。体育と同じように、こなせるレベルのものでなければ、楽しさや面白さを感じることはなかなかできません。

多読は、英語が苦手という人にも簡単に始められる学習法です。準備は特に必要ありません。苦手意識がある人は、挿絵の入った語数の少ないものから始めればいいのです。子どものころの読書の第一歩が挿絵のたくさん入った絵本であったように、多読用の本も初級レベルのものは挿絵が多く、文字も少なめの構成になっています。

たくさん読むことに最初は抵抗があるかもしれませんが、「一冊まるまる読み切る楽しさや達成感」を一度味わえば、多読を継続していくことも苦ではなくなります。最初から最後まで一冊読み切るという成功体験を重ねていくことで、もう一冊読んでみようという意欲もさらに強くなっていくはずです。

英語が苦手な人にもおすすめの学習法ですね。

紫野キャンパス図書館1階の語学教材コーナーには、ストーリーを楽しみながらたくさんの英文にふれられる洋書シリーズや文学全集などが充実しています。

また、図書館のデータベースに新たに追加された電子書籍多読リーダーでは、平易な英語で64ページに要約された世界の文学作品を文章とイラストを見ながらネイティブの音声で聴くことができます。

図書館が整備を進めている多読用ライブラリーの中心をなす物語や小説などの文学作品の特徴は、文章の中に会話文が多く含まれていることです。ストーリーを楽しみながらさまざまな会話文にもふれることができます。

言語の習得は、「模倣」から始まります。多読をするということは、「こういうときはこういう風に話せばいい、書けばいい」という例文を自分の中にたくさんインプットしていくということです。ネイティブが使用するような表現力を身につけるには、英作文ではなく「英借文」をしなさいとよく言われることです。ネイティブが書いたり話したりした手本となる英文を借りて、自分の中でいろいろと組み替えて、自分の言葉として表現するということが、多読を重ねていくうちに自然とできるようになります。多読の教材にはネイティブが使う生きた例文がたくさん出てきますから、読む力だけでなく、話す力や書く力もレベルアップできます。言語の習得では、インプットなくして、アウトプットはありません。

聞く力や語彙力の強化もできるのでしょうか？

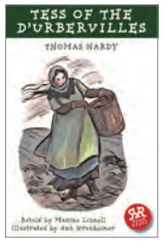
図書館1階に排架されている洋書シリーズにはCDがセットになっているものもあります。また、データベースに追加された電子書籍多読リーダーは、スマートフォンやPCのブラウザを通してネイティブの音声も聴けますので、読む力、話す力、書く力だけでなく、聞く力を高めていくこともできます。また、多読では辞書は引きませんが、わからない単語を前後の文から推測することが容易になれば、ボキャブラリーも自然と増えていきます。

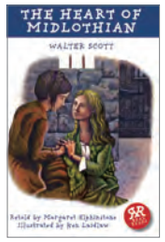
図書館の多読用ライブラリーは、今後もさまざまなジャンルのものを取り揃えていく予定です。サイエンスやノンフィクションのライブラリーも増えてきています。

たとえば通学の行き帰りの電車の中で毎日30分ずつ多読を繰り返せば、それだけでも相当な読書量になり、英語の習得へと確実につながっていきます。これまで4階にあった語学教材コーナーを1階に移動させたことでより利用しやすくなりましたし、電子書籍リーダーが加わったことで、スマートフォンさえあればいつでも多読ができるようになりました。多読はTOEICやTOEFLのスコアアップにもつながります。多読用ライブラリーを気軽に利用して、楽しみながら英語の習得につなげていってほしいと思います。

松本（まつもと） 真治（しんじ）
文学部英米学科教授
文学部長

1966年3月、大阪府茨木市生まれ。佛教大学文学部英文学科卒業（浄土門主賞受賞）、佛教大学大学院修士課程修了、龍谷大学大学院博士後期課程満期退学。龍谷大学文学部特定講師、佛教大学文学部専任講師、同助教授・准教授を経て、2011年に同教授。2012年9月から2013年8月まで英国レスター大学人文学部英文学科客員研究員。本学の教授法開発室長、学生支援機構長を歴任し、2018年4月より文学部長。 学外では、日本T. S. エリオット協会委員（2000年～）、日本英文学会編集委員（2009～2010年）、大学コンソーシアム京都・FD企画研究委員会委員長（2017年～）。 専門は英文学、英語教育、文学教育。 主な著書として、『モダンにしてアンチモダン―T. S. エリオットの肖像』（共著、研究社、2010年）、『スコットランドを知るための65章』（共著、明石書店、2015年）、『大学生のための英語の新マナビー第4巻 作文・会話ナビ』（共著、海鳴社、2014年）、『フランシス・キング短編傑作集』（共訳、新水社、2013年）、『多読で学ぶ英語―楽しいリーディングへの招待』（共訳、松柏社、2006年）等。





電子書籍多読リーダー
CLASSIC LITERATURE

イギリス文学を代表する
作家たちの古典的名作を収録

大いなる遺産／高慢と偏見／フランケンシュタイン／
ジェーン・エア／ロミオとジュリエット／ハムレット／
ガリヴァー旅行記／ガヴェイン卿と緑の騎士　etc.

電子書籍多読リーダー
MODERN LITERATURE

SF・ミステリー・アメリカ文学など、
さまざまなジャンルの作品を収録

宇宙戦争／ジキル博士とハイド氏／モルグ街の殺人／
緋色の研究／西部戦線異常なし／白鯨／グレート・ギャツビー／
ドリアン・グレイの肖像　etc.

電子書籍多読リーダー
WORLD LITERATURE

新約聖書の物語、中国・インドの古典文学、
ギリシャ神話、フランス文学など、世界の文学を収録

イスカリオテのユダ／マハーバーラタ／
西遊記／水滸伝／ゴータマ・シッダールタ／イーリアス／
レ・ミゼラブル　etc.

こんなん聴いてたんや、観てたんや

―図書館の視聴覚資料―

文学部日本文学科教授　坂井　健

多くの人は、図書館というと、ひたすら黙って本を読むところ、というイメージをもっているのではなかろうか？　無論、図書館は静謐を以て旨とする故、かくあるべきは当然である。しかし、図書館の使い方は、そればかりではない。

多くの人は、ブンガクケンキューというと、ひたすらムツカシイ本やら読みづらい文字とにらめっこをして、ウンウン唸る難行苦行、というイメージを持っているのではなかろうか？　無論、文学研究は、文献学（要するに、本を読んでなんじゃかんじゃと考える学問ですね）の一種である故、かかるイメージを持つのも当然である。しかし、それは文学研究の方法の一つであって、文学研究の目的ではない。

文学研究の目的は、ありていにいえば、人の心をそのままに感じ取ることである。それもたいていの場合、むかしの人の心を、である。むかしの人が何を経験し、何を感じ、何を考え、何を想像したのか。それをありのままに感じ取ることである。そのために古い本をウンウン言いながら読んでいるのだ。

というのは、それ以外に方法がないからだ。明治の半ばころまでの人々が何を考え、どのように感じていたのかを知るためには、巫女に霊を呼び出してもらって聞くのでなければ、字を読むか絵を見るかしか方法がなかったのである。もっとも、伝統芸能などのように、現在のものから当時を推定できるものもあるが、それは幸運な例外に属する。

ところが、明治の半ばを過ぎたころから、状況は変わってくる。明治三三（一九〇〇）年、パリで開催された万国博覧会に川上音二郎一座が出演し、オッペケペー節を披露しているが、そのときの音源が録音されて残っている。これが現在確認できるもっとも古い日本人の歌声らしい。この時、音二郎の妻貞奴の踊りが大評判となり、ピカソやドビュッシーの絶賛を浴びている。

ところで、蓄音機の普及は目覚ましく、大正三（一九一四）年に松井須磨子がカチューシャの唄を録音したときには、二万枚の売り上げがあったともいう。ということは、少なくとも、それくらいの蓄音機があったということだ。もちろん、この音源も残っていて、その下手くそさには辟易するが、演劇革新を目指した島村抱月たちの気持ちや当時の雰囲気は伝わってくる。

島村抱月と松井須磨子らの芸術座は、抱月のスペイン風邪による突然の死と、須磨子の後追い自殺によって、いったんは解散してしまう。

抱月の演劇改革運動は、大きくいえば、一種の社会改良運動であり、西洋の新思想を盛り込んだ演劇を、日本で上演することにより、日本社会を改革するところにあった。当時、西洋で話題であった「新しき女」たちを演劇によって紹介し、その思想を広めようとしたのである。

これとは別の角度から、演劇の改良？に貢献する動きもあった。それは浅草オペラである。

帝国劇場歌劇部はイタリア人音楽家のローシーを招いて、日本人によるオペラの実演を試みたが、興業的に成立せず、挫折してしまった。ローシーはこれに屈せず、私財をはたいて日本人音楽家を育てようとした。その代表格が田谷力三である。（知らない人は、ユー・チューブで聴いてみてください）

田谷力三らによる浅草オペラは、一世を風靡し、全盛のときには、お客が入りすぎて、二階の席から落っこちたこともあったという。浅草オペラは、文学者たちにも人気で、宮沢賢治は、次のように詩の中にうたいこんでいる。

夜ぞらにふるふビオロンと銅鑼、
サミセンにもつれる笛や、
繰りかへす螺のスケルツォ
あはれマドロス田谷力三は、ひとりセビラの床屋を唱ひ、
高田正夫はその一党と、
紙の服着てタンゴを踊る
（函館港春夜光景、一九二四・五・一九）

高田正夫は、正しくは高田雅夫。高田は、浅草オペラで活躍した舞踏家である。この詩は、賢治が花巻農学校の学生と修学旅行で函館を訪れた時に作ったものである。

五月半ばの函館といえば、待ちに待った春が訪れ、さまざまな花々がいっせいに咲きだす季節である。公園には、花見の客が訪れ、あちこちで酒盛りがはじまっている。そんな春の夜の何となく心の浮き立つような風景を浅草オペラの舞台に重ね合わせているのだ。

賢治は、いわゆるペラゴロで、浅草オペラの大ファンだった。上京のたび機会あるごとに見に行っていた。その

ときの舞台風景を思い出しながら、函館の夜を楽しんでいたのである。よほど好きだったのだろう。チェロやオルガンも弾ける賢治は、浅草オペラ風のオペレッタを自分で作詞作曲して、学生に演じさせてもいた。賢治だけではない。川端康成も谷崎潤一郎も浅草オペラが大好きだった。では、彼らは、実際にどんな音楽を聴いて楽しんでいたのか？

ここに「浅草オペラ　華開く大正浪漫」（山野楽器、一九九八）というCDがある。明治末年から大正に入るとすでにSPレコードは商品として出回っていた。このCDは大正から昭和にかけて録音されたSPを復刻したものである。多くはアコースティックの吹き込みで、音質はものすごく悪い。歌も伴奏も現代の水準からみると、あまり上手とは言えない。しかし、そこにはその時代の音があり、声がある。それは、ムツカシイ本よりも雄弁に当時の人々の感じていた世界を語ってくれるのだ。

谷崎は、浅草オペラだけでなく、映画も大好きだった。みずから映画会社にかかわっていた。岡田茉莉子の父の岡田時彦を可愛がり、岡田時彦という芸名も、谷崎の命名であったし、谷崎の妻の妹も女優で、『痴人の愛』のナオミのモデルといわれる。ところで、谷崎は、無声映画の傑作『カリガリ博士』を絶賛している。無声映画は、蓄音機よりもはやく商業化され、普及していた。こうした無声映画も、復刻されており、現在では簡単にみることができる。谷崎がどのような点に感銘を受けていたのかを、はっきりと追体験することができるのだ。

トーキー映画の第一作は、昭和六年の『マダムと女房』であった。サトウ・ハチロー作詞の主題歌が挿入されるほか、当時流行の文化住宅や昭和初期の田園調布のようすも見て取れる。田中絹代ふんする主人公の女房が割烹着を着たかいがいしい女房姿であるのに対し、となりのマダムのモダン・ガールぶりとそれを取り囲んでジャズに興ずる若者のモダン・ボーイぶりも印象的で、当時の風俗がありありと伝わってくる。

同じ年に、『茶目子の一日』が発表された。これは大正八年に浅草オペラのメンバーによって作られた、オペレッタ風童謡をアニメ化したもので、無声映画にレコードを同調させた「レコード・トーキー」である。中山晋平の秘蔵っ子の童話歌手、平井英子の歌声で、朝、お日さまが顔をだし、雀が「唱歌」のお稽古をして、納豆売りのお婆さんがやってくるところから始まる。次に、日本髪に和服の上から割烹着を着たお母さんが茶目子を起こし、「ライオン・歯ブラシ」で歯を磨き、シャボンで顔を洗った茶目子が、ご飯を食べて学校へ行くという風に場面は進んでいく。茶目子は、おかっぱ頭であり、白いセーラー服にスカート、黒のストッキングにベレー帽、ランドセルといういでたちで学校へ向かう。学校では、九九の勉強をしているから、茶目子は小学二年か三年くらいだろう。電車道の雑踏を避けた茶目子は「足袋屋」の横丁を歩いて学校に行くのだが、これも当時の風俗を伝える貴重な資料である。

茶目子は、苦しくなるほど朝ごはんをお腹いっぱい食べる幸せな生活を送っているが、この年、満州事変が勃発し、日本は長い戦争の時代へと突入して行く。

このアニメの最後で茶目子は活動を見に行くが、そこに「故　人見絹枝嬢の面影」という題字入りで、日本人女性初のメダリストで、この年急死した人見絹枝の映像が映し出される。女性が人前で太ももをあらわにする陸上競技への偏見と闘って、過労のあまり二十四歳の若さで世を去った女性である。そんな世相も見て取ることができる。

昭和六年といえば、「酒は涙か溜息か」が大ヒットした年でもある。高橋掬太郎作詞、古賀政男作曲、藤山一郎歌によるこの曲は、酒、涙、悲恋を歌って、その後の「演歌」の方向性を決定づけたと言ってよい。そもそも演歌というのは、自由民権運動の頃、演説をする代わりに唄を歌ったことに始まるもので、政治的主張、社会批判を主眼とするものであった。それがこれ以降、政治性、社会性を失っていくことになる。それは次第に強化されていく言論統制の世の中に、演歌が適応していった結果かもしれなかった。

戦争の激化とともに、軍国歌謡が作られるようになる。昭和一二年の「軍国の母」はその代表である。島田磐也作詞、古賀政男作曲、美ち奴歌によるこの曲は、表面的には、戦争賛美の歌詞を持っているが、切々とした美ち奴の歌と悲痛な古賀政男のメロディーによって、歌詞の内容とは裏腹に、当時の人々の戦争に対する感じ方を表しているように思える。「心置きなく祖国のため／名誉の戦死頼むぞと／涙も見せず励まして／我が子を送る朝の駅（略）生きて還ると思うなよ／白木の柩が届いたら／出かした我が子あっぱれと／お前の母は褒めてやる」この歌は、陸軍省の肝いりであるにもかかわらず、このような心にもないことを表面的には言わざるをえなかった、当時の社会のすさまじさをまざまざと伝えているように思われるが、どうだろうか。

古賀政男は軍国歌謡や軍歌に悲痛な旋律を付け続けたため、後に当局からにらまれることとなった。

これは国策の軍国歌謡であるが、映画も同様であった。火野葦平の小説を映画化した『土と兵隊』（昭和一四年）は、戦地の兵隊さんは、こんなに苦労をしているのだから、銃後も頑張りなさいという宣伝映画である。

しかし、画面には、果てしなき原野をただひたすら行軍し続ける兵隊の姿と、ときおり起る戦闘の場面では、銃撃戦の様子が淡々と描き出される。政府の意図とは裏腹に、絶望的な行軍と戦争の凄惨さが伝わってくるのだ。

昭和一八年、「みなさん！　この映画の意気で！　明朗、健全、唄って張り切りませう！」の宣伝文句で、ミュージカル映画『ハナ子さん』が封切られた。一億総動員の呼びかけだったわけだが、杉浦幸雄が『主婦の友』に連載した漫画『銃後のハナ子さん』を映画化したもので、大ヒットした。漫画のハナ子さんのモデルは、この映画の監督マキノ正博夫人の轟夕起子で、この映画の主演女優でもある。歌と踊りの中にハナ子さん一家の明るい生活ぶりと、トントントンカラリンの隣組の人たちとの暮らしが楽しく描き出されるホーム・ドラマであった。

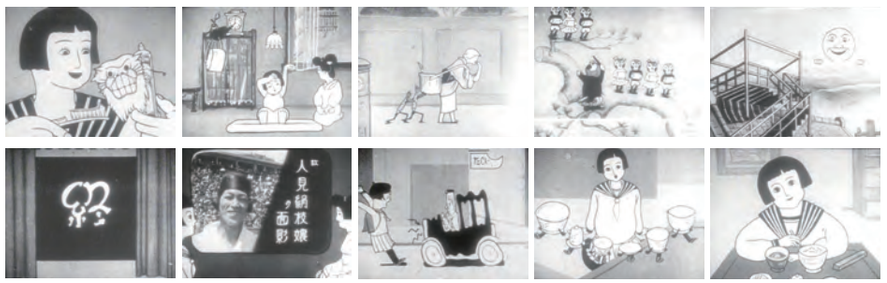
ところが、つぶさに見ていくと戦争の影響が細かく描きこまれている。ハナ子さんのお兄さんは、出征中だし、弟は、小学一年生くらいなのに、軍人の帽子をかぶって、戦争に行くことに憧れている。ハナ子さんは、恋人の五郎君と結ばれ、めでたく妊娠するが、やがてその五郎君に召集令状がやってくる。

映画の中には、戦争に対する批判めいたものは何も描かれない。ただ笑顔と歌声だけに満ちた映画である。けれども、戦争の残酷さを雄弁に物語っているのだ。

以上、思いつくままにいくつかの例を挙げて来た。芸術はイメージによって真理を伝えることである、というのは、二葉亭四迷の主張である。音響資料、映像資料は、ときとして文字資料よりも雄弁に真理を伝えてくれる。

坂井（さかい）　健（たけし）
文学部日本文学科教授

著書に『没理想論争とその影響』佛教大学研究叢書 27（思文閣出版、2016年）など。専門は日本近代文学、比較文学、比較文化。研究テーマは、文学と芸術、思想、文化。近代文学史を時代背景との関係から考察している。70年の歴史を持つ京都のダンス・バンド、楽団クンパルシータに参加。戦前から活躍してきた元プロたちと演奏活動を行い、古い音楽や映画について啓発を受ける。



佛教大学附属図書館の浄土教関係資料——先人の負託に応える

仏教学部仏教学科教授　本庄 良文

（一）旧佛教大学図書館

個人的なことがらや、研究対象としている特定の書籍について記すことをお許し頂きたい。

本学と初めて直接の関係が出来たのは今から四〇年近く前、一九八〇（昭和五五）年度、故藤堂恭俊先生（後、増上寺御法主となられる）が仏教学科の主任であられた時である。出身大学の助手を二年務めたあと、肩書も何もなく、論文とも言えないものをいくつか発表しただけの私に佛教大学の教壇に立つよう導いて下さった。パーリ語（スリランカ、タイなどの南方仏教の聖典語）や、原始仏典、仏教基礎学としての『倶舎論』、さらには、今では考えられないが、一般教養の語学も少し担当させて頂いた。仏教学科には一学年百人ほど学生がいて、たいへん賑やかだった。パーリ語の授業では若気の至りで、大家の書かれた文法書の記述に異論を唱え、学生に「びっくりしました」と言われたりもした。

当時の佛教大学図書館は、今の図書館と比較にならない、こぢんまりした建物であった。四階と五階に仏教学科の先生方の研究室や資料室があった。学科の助手が院生等の世話をしておられた。当時は、浄土学、仏教学、仏教文化の院生が互いに交流できた。（その後、長らくこれらの研究室が別々であったのが、基本的に旧に復したのはとても喜ばしい。）

非常勤でありながら私は厚かましくもそこに出入りし、資料室の資料を当たり前のように使わせてもらった。特に、北京版チベット大蔵経を、たくさんコピーさせて頂いたと記憶する。仏教学やインド学関係の資料は資料室でだいたい揃うので、旧図書館の本体には、ついに行かないままで終った。

有難かったのは、右のような事情で、専任の先生方や、若手の非常勤講師、院生、学生の皆さんと仲良くさせて頂いたことである。自分自身が浄土宗僧侶である上に、家族や親族に佛教大学の関係者があった親近感も大きかった。二〇一〇（平成二十二）年、特別任用教授として本学仏教学科に奉職したとき、存じ上げない方が殆どおられなかったのはその時以来のご厚誼の賜物である。

一九八九（平成元）年に神戸女子大（須磨区）の専任教員となり、次第に佛教大学との縁が遠のいたが、二〇〇四（平成十六）年春、再びその関係が復活した。

（二）佛教大学大学院授業担当——『往生要集』と良忠述『往生要集義記』

その年の三月二十九日、大学時代の主任教授であった本学仏教学科教授梶山雄一先生が満七十九歳で亡くなった。四月からの大学院の授業計画が確定していたところへ突然穴が空くことになったので、すぐに代講を立てる必要ができた。後で知ったことであるが、当初、学科では、すでに縁のある東京の先生に一年間一コマをお願いしようとの考えもあったそうである。しかしご負担を考え、その先生には半年だけお願いし、あとの半分を近場の人に、となったという。そこでかたじけなくも選んで頂いたのが、ちょうどその年の三月末日をもって神戸女子大を退職していた私であった。

私の選んだ教材は、浄土宗の第三祖に位置づけられる良忠（一一九九～一二八七）の『往生要集義記』（『浄土宗全書』第十五巻所収、全八巻）という文献である。これは、恵心僧都源信の著した『往生要集』に対する、現存最古の本格的な注釈書である。そのころまでに私の関心は、初期仏教、部派仏教から、浄土教へと広がっていたのである。

私なりに考えたのは次のようなことだ。

——『往生要集』は、日本浄土教思想の土台を作った、極めて重要な文献であると同時に、文学、芸術、文化方面にも多大の影響を与えた典籍である。またこの書は、もともと天台僧であったわが法然上人が、浄土の教えに入るきっかけを作り、上人自身がいくつもの注釈書（といっても簡略にその大意を解釈したものであるが）を残しておられる。さらに浄土真宗の伝統においても、「七祖聖教」の中に組み込まれており、恵心僧都『往生要集』⇒法然『選択本願念仏集』⇒親鸞『教行信証』の順序で自宗の系譜が理解されている。また、著者の源信が、天台宗の理論的支柱であっただけでなく、仏教基礎学の知識を提供する倶舎論・法相唯識・因明（仏教論理学）の学者でもあったことから、『往生要集』には自ずとその方面の学識が見え隠れする。この書は浄土教を学ぶ者だけでなく、広く仏教を学ぶ者にとっても、有用な教材である。

——他方、『往生要集義記』は、基本的には『往生要集』を、浄土宗の立場から読み解こうとするものである。ところが一方では、注釈者良忠は、豊富な資料を駆使する大学者であると同時に、どのような立場にも偏しない、つまり「通仏教的」な視点をも決して失わない人である。事実、『往生要集』研究の第一人者である石田瑞麿（一九一七～一九九九、西本願寺系の人）の訓読（日本思想大系本、岩波書店）においてもしばしば良忠の説が採用されている。

——よって、この書は、『往生要集』と同様、浄土学、仏教学、仏教文化の垣根を越えて、すべての大学院生に読んでもらうに相応しい文献だ。これまで、「序文」と「地獄」に対する注釈については、あらかた訓読、現代語訳注を終えているので、「地獄」に続く「餓鬼道」について読むのがよかろう。——

こうして密かに気合いを入れて臨んだ授業に正式に登録したのは、残念ながら浄土学の学生ひとりだけ（大川内優君、現、畔柳優世氏）であった。私の思いは空振りに終わったかに思われた。

（三）受講生による重要資料の相次ぐ「発見」

ところが、そのたったひとりの登録者とその周辺には、熱心な学生が揃っており、非公式に授業や資料蒐集・読解に関わってきた。南宏信（現仏教学科専任講師）、大田明光などの諸氏である。大川内氏にはまた、稲田廣演という、書誌学に強い龍谷大学出身の知人がいた。かれらは、本学の図書館はいうに及ばず、東京の尊経閣文庫（加賀藩主前田家の文庫）にまで足を伸ばし、異本である『往生要集鈔』を含め、次々と関連する資料を蒐集していった。以下は印象に残ったこと。

その一、大川内君が、本学図書館の、当時まだカードでしか検索できなかった資料の中から、貴重な中世写本と見られる『往生要集鈔』（写真1および前頁上段写真参照）を「発見」した。

（写真1）

その二、ある日、大川内君は、「近着の古書店の目録に、元治版『往生要集義記』が載っていますよ」と言ってくれた。元治版は、江戸末期増上寺の学僧たちが心血を注いで校訂、注記した、見事な版本であり、『浄土宗全書』の底本でもある。本学図書館の蔵書検索でヒットしなかったので、件の古書店に、「大学に購入してもらう。だめなら私が引き取る。」と約束して手元に送ってもらった。その後、選書委員の先生から、購入可能との連絡を頂き、無事元治版は、本学図書館に納入された（黄色表紙、写真2参照）。

（写真2）

その三、授業中、大川内君は、『浄土宗全書』本と『往生要集鈔』を見比べ、たびたび「内容が違う」と発言した。私は、残酷にも全く取り合わないでいたが、それには訳があった。大正大学の大谷旭雄先生が、ご論文（『往生要集義記』について」）で、『往生要集義記』と、『往生要集鈔』との「両者には文字の脱落等の相違はあるものの説示自体を分つ相違は指摘されない」とされていたからである。先生の学問のスタイルは誠に堅実なものであったので、私はその結論を、疑う余地のないものと見ていたのである。

ところが、やがてその頑迷な私が眼を見開かされる時がやってくる。両者の本文は、たしかに基本的に八割方合致するが、細部については多くの相違のあることが次第に明らかになっていったのである。具体的には以下の通り。

一、『往生要集鈔』には、尊経閣文庫本（十四世紀写本）、寛永三年版、五年版（いずれも古活字版）などがあり、『往生要集義記』には、古活字版（出版年不明、本学図書館所蔵）、寛永十八年版、元治版等があるが、『鈔』のグループ同士と『義記』のグループ同士はそれぞれ似通っている。

二、『義記』は、『鈔』を、寛永五年と寛永十八年の間のいずれかの時点で、編集し直したものと推測される。

三、『義記』の独自部分の内容からして、再編集に関与した人物には、相当深い学識があったと想像される。

その後、これらの文献の解明については、南宏信氏が精力的に取り組むようになって現在に至っている。上のような事実が、すでに大田次男氏によって言及されていたこと（『金澤文庫研究』通巻二三三号）を含め、詳しくは氏の「良忠撰『往生要集』注釈書の成立過程」（『法然上人八〇〇年大遠忌記念　法然佛教とその可能性』佛教大学総合研究所編法蔵館、二〇一二年所収）、本庄良文「『往生要集義記』第一――訓み下しと現代語譯（九）――阿鼻地獄（その一）」（『浄土宗學研究』第三十三號、二〇〇六年所収）に譲る。

（四）先人の負託に応える

受講生たちが本学図書館を起点にして続々と新資料を発掘していくのを見て、また、そのいちいちを実際に手に取るうち、私はこれらの書物を本学図書館や、文庫に伝えた先人の思いに触れた気がした。勝手な受け止めかもしれないが、それは、「この貴重な財産を、あなた方に託しますので、それらが貴重であるゆえんを、皆さんの手で再発見してください」ということになる。

特に浄土教、浄土宗関係についていうと、本学図書館には、もと寺院所蔵であった図書（特に浄土学関係）が多く蔵されていることに気づかされる。

- 佛教大学図書館編『佛教大学図書館蔵佛教関係和古書目録稿』一九七九～一九八八
- 佛教大学図書館編『佛教大學圖書館蔵成願寺文庫書籍目録稿』一九七九年
- 佛教大学図書館編『佛教大學圖書館蔵萬福寺文庫書籍目録稿』一九八〇年
- 佛教大学仏教文化研究所編『佛教大学図書館所蔵和漢書中浄土宗学関係書籍目録稿』一九八〇年
- 佛教大学図書館編『佛教大學圖書館蔵西谷寺文庫書籍目録稿』一九八〇年
- 佛教大学図書館編『佛教大学図書館蔵天性寺文庫書籍目録稿』一九八六年

また、必ずしも本学図書館所蔵書籍についてのものではないが、以下のような目録が、本学の研究所や教員によって編まれている。

- 佛教大學浄土宗文献センター編『法然院光明藏書籍目錄稿』一九八五年
- 坪井俊映編『浄土宗典籍目録 近世篇増補版』二〇一〇年
- 佛教大学総合研究所『浄土教典籍目録』二〇一一年

個々の資料の貴重さに気付き、寺の書庫や文庫に収め、自ら学習を重ねつつそれらを大切に伝えた人、本学図書館等に寄贈した人、苦心して目録を編纂し、データを整えて下さった人。これらの人々の負託に応えるのは、われわれの責務であるし、幸運にほかならない。

（五）佛教大学法然仏教学研究センター

いま私は、本学の附置機関である、法然仏教学研究センター長を拝命している。そこでは、専任教員や若手研究員とともに、法然上人の遺文や関連する文献の解読、校訂、現代語訳注などの基礎的作業を行っている。具体的には、それぞれ班を設けて、道綽『安楽集』、法然『和語灯録』、『逆修説法』、明恵『摧邪輪』、良忠『往生要集義記』『往生要集鈔』、桑門秀我『選択本願念佛集講義』、伝書（浄土宗教義を伝承する書物）類、などの解明に取り組んでいる。徐々に成果を蓄積し、来年度から研究成果を単行本の形でシリーズ化していく計画である。これからも本学図書館のお世話になりつつ、先人たちの「負託」に応えていきたい。

桑門秀我『選択本願念佛集講義』

本庄 良文（ほんじょう よしふみ）
仏教学部仏教学科教授
法然仏教学研究センター長

京都大学大学院文学研究科博士後期課程中途退学。文学修士。京都大学助手、神戸女子大学教授、佛教大学特別任用教授を経て平成26年度より教授。研究分野は、浄土学、仏教学。著書・論文に『傍訳選択本願念仏集』（上下二冊、四季社、2001年、共著）、『倶舎論註ウパーイカーの研究 訳註篇』（上下二冊、大蔵出版、2014年）、「『選択集』第六章における特留念仏釈と諸行往生の可否―平雅行説の検討―」（『福原隆善先生古稀記念論集 佛法僧論集』山喜房仏書林、2013）など。

『職業としての学問』の《原風景》を求めて

社会学部公共政策学科教授　野﨑 敏郎

著名だが不可解な講演録

マックス・ヴェーバー（一八六四～一九二〇）の『職業としての学問』（一九一九年刊）は、何十年にもわたって、大学生必読の書として、つねに上位にランキングされている著作だが、私が学生時代に邦訳を読んだとき、さっぱりわからなかった。ひととおりドイツ語を習得してからは、原書と突きあわせて何度も読んだが、それでもわからなかった。この著作を読解するための解説文が数多く存在し、それらを参照してみたが、役に立たなかった。

とにかく不思議なのは、論旨が通っていないことであった。この著作は講演録に加筆されたものだが、さっきしゃべったことと、いましゃべっていることが、どうみても正反対なのである。読んでいて、たびたび、「言っていることがさっきと逆なんだけど、いったいどっちなの」とヴェーバーに詰問したくなるのである。

その後、ドイツ語文法を掘りさげ、ドイツ語読解の経験を積むなかで、そうした《撞着記述》のかなりの部分が、「訳者」（と自称している人々）の曲解であること――つまり文意が正反対に誤訳されていること――に気づいた。同時に、従来の自称訳者たちが、文法の初歩を学んでいなかったことが判明した。また、その初歩的な誤訳に気づかない研究者たちが多いことにも驚かされた。さらに、そうした誤訳を訂正してもなお読解できない箇所がいくつも残っており、この著作の全体像は、依然として暗渠のなかに沈んだままであった。

ヴェーバー周辺の足跡調査

私は、大学院在学中に、ヴェーバーの著作にかんする本格的な研究に取りかかり、とりわけ、ヴェーバーと、彼の時代のドイツにおける日本社会研究との結びつきを考察対象とした。そのとき、カール・ラートゲン（一八五六～一九二二）という社会経済学者の存在が浮上した。ラートゲンは、一八八二年から一八九〇年まで滞日経験があり、一九〇〇年から一九〇七年までは、ハイデルベルク大学におけるヴェーバーの同僚であった。ヴェーバーは、ラートゲンから、日本社会にかんする重要な情報を得ている。その後ラートゲンはハンブルクに移るが、ヴェーバーとの交流は生涯続いた。

ヴェーバーの足跡についてもラートゲンの足跡についても、解明されていない部分が多い。私は、まず日本国内の文献を調べ、二〇〇一年からは、この二人の足跡を追う調査をドイツにおいて開始した。

この調査はいまも続けており、この夏には、通算二十七回目のドイツ渡航調査を予定している。

私が必要とするのは、十九世紀後半から二十世紀初頭にかけてのドイツ語文献なので、日本国内の図書館では間に合わないケースが多いのだが、佛大図書館に、関連する重要な稀覯本がいくつか所蔵されている。たとえば、ゲオルク・イェリネク編『ハイデルベルク大学学則例規集』（一九〇八年刊）は、この大学の学内問題を考証するうえで欠くことのできない第一級の資料だが、日本国内六館にしか所蔵されていない。これが本学に所蔵されているので、おおいに助かった（写真①）。

写真①
ゲオルク・イェリネク編『ハイデルベルク大学学則例規集』（1908 年刊）。重要な資料集だが、確認できたかぎりで、ドイツ 5 館、日本 6 館にしか所蔵されていない。本学図書館所蔵。

ヴェーバーが編集に加わっていた学術雑誌『ロゴス』の合冊版も所蔵されており、当時の研究動向をよく伝えている（写真②）。

J・J・ラインらのドイツ人研究者たちによる日本研究文献もたいへん重宝なものである（写真③④）。本学図書館は、私にとって、長年にわたる《知の旅》の拠点でありつづけている。

写真②
雑誌『ロゴス』合冊版（1910 ～23 年刊）。本学図書館には、全 22 巻のうち、第 1 ～ 11 巻が所蔵されている。

写真③
ヨハネス・ユストゥス・ライン『旅行調査と研究とにもとづく日本論』（上下巻、1881/86 年刊）。精度の高い学術的日本研究の嚆矢として定評がある。本学図書館所蔵。

写真④
『ドイツ東亜博物学・民族学協会論集』。ドイツ人による東アジア研究の成果が盛られた重要雑誌である。本学図書館には、15 巻刊行されたなかの第 1 ～ 6 巻(1873 ～ 97 年刊) が所蔵されている。

大学問題とヴェーバー

この調査をすすめるなかで、近代ドイツの深刻な大学問題と、その大学問題にたいするヴェーバーのスタンスと所見をつぶさに知ることができた。そして、この知見を援用して考証した結果、かつて学生時代にまったく読解できなかった『職業としての学問』が、じつは、ドイツの大学問題にどのように取りくむべきかを学生に考えさせるための講演だったことが判明した。そして、これまで意味がわからなかった箇所の真意をすべて解明することができた。

従来、この講演は、〈脇目も振らずに自分の職業や職分のために尽力せよ〉と主張されているかのように誤読されてきた。ところが、ヴェーバーの主張はまったく逆であった。彼は、〈自分の職業や職分のために尽力しているだけでは、近代社会と近代大学とに特有の諸矛盾を打破することはできないのであって、人間としての務めを果たす闘争こそ重要だ〉と力説している。〈職業のために尽くせばいい〉というのは他人の主張であり、ヴェーバーは、この主張を鋭く批判している。ところが、従来の「訳」にあっては、このもっとも重要な論旨が正反対にねじまげられていた。これでは、いくら読解を試みてもわからなかったのは当然である。

私の調査研究の成果は、『大学人ヴェーバーの軌跡――闘う社会科学者――』（晃洋書房、二〇一一年刊）および『ヴェーバー『職業としての学問』の研究（完全版）』（晃洋書房、二〇一六年刊）の二つの著作にまとめ、さらに追加調査によって判明した事実を、現在『佛教大学社会学部論集』に連載中の拙稿に盛りこんでいる。

テキスト改竄の問題

この二つの著作をまとめる途上で、驚くべき問題状況に直面した。

第一に、テキストの不当な改竄である。『職業としての学問』の初版本は、一九一九年六月下旬～七月初頃に刊行されている（写真⑤）。これはヴェー

写真⑤
ヴェーバー『職業としての学問』初版本（1919 年刊）。表紙には、1919/20 年冬学期に、フライブルク大学学生リリ・ノイマンが購入したと記されている。野﨑所蔵。

バー自身が校閲・校正した唯一の版である（彼はこの翌年に亡くなる）。この講演録は、その後、妻（未亡人）のマリアンネによって、『科学論集』という論文集（初版一九二二年刊）に収録されたが、そこにおいて、このテキストがいくらか改変されている。さらに、『科学論集』第二版（一九五一年刊）がヨハネス・ヴィンケルマンによって編集されたさいにも改変がなされた。そして大きな問題は第三版（一九六八年刊）である。そこでは、およそ常識では考えられない異様な改竄が敢行されている。

ヴィンケルマンが第三版を編集したときの作業文書は、現在ミュンヒェンの『マックス・ヴェーバー全集』編集部に保管されている。私がここに出向き、この文書を直接手にとって調べ、ヴィンケルマンによる書き込み状況を点検したところ、そこには、恣意的な書き替えがなされた痕跡が生々しく残されていた。

たとえば、ヴェーバーが„aber“（しかし）と書いていたのを、ヴィンケルマンは„also“（つまり／したがって）に書きかえた。また„oder“（あるいは）を„und“（および）に改変した（拙著『完全版』個別注解⑧11、㊳10）。いずれも、この書き替えによって意味が通らなくなってしまっており、このほかにも首を傾げざるをえない書き替えがいくつもある。なかに二箇所、正当な改変（初版における誤記の訂正）があるが（拙著個別注解㉗6、㊳10）、それ以外の書き替えは有害無益である。こうした蛮行には、ただもう唖然とさせられた。

じつは、マリアンネが編纂した『科学論集』初版において、すでに各収録稿の書き替えがおこなわれており、とりわけ、論文『社会学系科学と経済学系科学の「価値自由」の意味』（一九一七年）のなかで、ヴェーバーが「主観的」と書いているのを、彼女は「客観的」と書きかえてしまっており、そのためこの箇所は意味不明である。しかしヴィンケルマンは、マリアンネによるこの不当な書き替えを訂正せず、それどころか、そこに彼自身による恣意的な改竄を加えていったのである。

日本において、長年にわたってレファレンスとされてきたのは、この常軌を逸した改竄を経た『科学論集』第三版、およびこの改竄を踏襲している第四～七版である（写真⑥）。日本の読者の大半は、ヴィンケルマンによって改竄されたテキストを――それとは知らずに――読んできたのである。

写真⑥
ヴェーバー『科学論集』各版。右から第１～６版。本学図書館には第3･4･6版が所蔵されている。第1･2･5版は野﨑所蔵。なお、その後刊行された第７版は、第６版の写真複製版である。

さらに私は、普及版ヴェーバー論文集（第一～六版）も調べ、ここでもヴィンケルマンが書き替えと迷走を繰りかえしていることを確認した（写真⑦）。

『マックス・ヴェーバー全集（Max Weber Gesamtausgabe）第Ⅰ部門第十七巻』（一九九二年刊）において、ヴィンケルマンによる書き替えの大半は排除されているが、仔細に点検したところ、最新のテキスト研究成果であるはずのこの巻もまた、初版テキストを正確に再現していないことが判明した（写真⑧）。

写真⑦
普及版ヴェーバー論文集の各版。右から第１～６版。本学図書館には第４・５版が所蔵されている。第１・２・３・６版は野﨑所蔵。

写真⑧
『マックス・ヴェーバー全集第Ⅰ部門第17巻』（1992年刊）。『職業としての学問』と『職業としての政治』が収録されている。本学図書館所蔵。

結局、信頼できるのは初版本だけなのだが、これは日本国内二館にしか所蔵されていない。私は、この初版本をネットショップで発見し、イスラエルの古書籍商から購入し、以後座右に置いている。

『全集』の誤編纂

第二の問題は、『マックス・ヴェーバー全集』の誤った編纂である。『全集』版の解説では、『職業としての学問』が、一九一七年十一月七日に一回語られただけで、二回目の講演はなかったと決めつけられている。しかし私は、周辺事情から、これに疑問をもち、『全集』編集部に保管されている関連資料をつぶさに点検し、またそれ以外の資料をも点検し、ヴェーバーの足取り調査をおこない、彼が、一九一九年一月二十七日に、二回目の講演をなしていたことを突きとめた。同時に、『全集』編集者が、こうした足取り調査を怠っていたことも判明した。

誤読が多かったのはなぜか

第三の問題は、ヴェーバーが非常に簡略な記述で済ませている箇所にかんして、日本人読者による文意把握が正反対になっているケースが多々みられることである。さらに、六種類の英訳がすべてまちがっている箇所がいくつもあることから、英米人も誤読していることが明らかであり、また相当数のドイツ人もまた誤読していたと思われるケースも見受けられる。

『職業としての学問』のテキスト中には、レジュメかメモ書きのようなラフな箇所がいくつもあり、文が不完全なままになっている箇所もある。原著者（講演者）自身によって、故意にそうした体裁にされているのである。これは、この著作がもともと講演であったときの臨場感を醸しだすのに有効なのだが、反面、わかりにくさや誤読の元にもなっている。そこで、ヴィンケルマンは――彼としてはよかれと思って――テキストのリライトを敢行したのであろう。もっとも、それによって、彼自身がひどい誤読に陥っていることを自己暴露する結果になったのだが。

著作の《原風景》を求めて

古典的著作のテキストは、定評のある著作集版を読めばいいかというと、そうではない。初版に遡ってはじめて判明する事実がいくつもある。さまざまな試行錯誤の末に刊行された独創的な著作の初版本には、その特殊な歴史的経緯――「産みの苦しみ」――のため、論述が錯綜している箇所や、読みにくい箇所や、文法上の不備や、不十分ないし不完全な記述が残っている。しかし、後世の者がそれを校訂し、「わかりやすく」リライトしようとすると、その校訂者がその著作の理論的地平や歴史的背景に疎い場合、論旨をねじまげてしまうことになりがちである。校訂者が原著者の妻であろうと、長い蓄積を有する研究者であろうと、ここに記したように、大きな失敗・錯誤が生じている。

マリアンネ・ヴェーバーやヴィンケルマンの失敗を他山の石として、原典に立ちかえり、その講演が語られた現場に立ち、その著作が刊行された時点に立って、その著作の《原風景》を復元することは、学問を生業とする者の責務である。これは、労の多い割に報われることのすくない性質のものなのだが、私は、研究者としても人間としても、こうした仕事にやりがいを感じている。その《原風景》においては、人間ヴェーバーが近代社会にたいして企てた熾烈な闘争がくっきりと浮かびあがっており、そこにこそヴェーバーの真価とアクチュアリティとが存するからである。

野﨑 敏郎（のざき としろう）
社会学部公共政策学科教授
総合研究所長

神戸大学大学院文化学研究科（博士課程）単位取得退学。福岡教育大学講師・助教授を経て本学着任。『大学人ヴェーバーの軌跡』（晃洋書房、2011年刊）、『ヴェーバー『職業としての学問』の研究（完全版）』（晃洋書房、2016年刊）、「ヴェーバーと『専門人』との《距離》」（宇都宮京子他編『マックス・ヴェーバー研究の現在』所収、創文社、2016年刊）、「カール・ラートゲンの少年期と青年期（上下）」（『佛教大学社会学部論集』第51・54号、2010/12年）、「《闘争する人格》と大学問題」（『佛教大学社会学部論集』第63号～、2016年～、連載中）など。

所蔵資料紹介

丹波国桑田郡灰屋村文書

図書館専門職員　尾下 仁美

丹波国桑田郡灰屋村文書の概要

本稿で紹介するのは、佛教大学附属図書館所蔵の「丹波国桑田郡灰屋村文書」である。本史料は、二〇〇五年に古書店より購入したもので、もとは灰屋村の和田家に伝わったものと思われる。購入後は、本学の渡邊忠司教授（当時）のもとで整理が進められた。

丹波国桑田郡灰屋村は、大堰川上流域に位置する禁裏領山国荘の荘域に含まれる村である。現在の京都市右京区京北灰屋町にあたる。江戸時代は幕府領、幕末には丹波篠山藩領であった。桑田郡上黒田村の南、同郡芹生村の北に位置し、黒田三ケ村（上黒田・下黒田・黒田宮）の枝村とみなされていた。

村高は延宝六（一六七八）年の検地以降三九・六七六石で、耕地が少なく林業を生業とし、山役は三・四二四石であった（『京都府の地名』平凡社、一九八一年）。また明治五（一八七二）年段階での村の戸数は一七戸であった（京都府立総合資料館編『京都府市町村合併史』京都府、一九六八年）。

文書の宛名等から推測すると、本史料の旧蔵者である和田家は江戸時代には主に「源兵衛」または「儀兵衛」を名乗り、灰屋村の庄屋をつとめていた時期もあったようである。明治の初めには、和田源助が灰屋村戸長をつとめていた。

本史料は全二三八点で、その多くは一紙物である。史料の作成年代は天文一六（一五四七）年が最も古く、天正五（一五七七）年、慶長一八（一六一三）年、寛永二（一六二五）年といった近世初期の史料も数点含まれる。また最も新しいものは明治三八年の領収書である。

内容を見ると、年貢免定や皆済目録がまとまって残っているほか、山林の売券も多い。また灰屋村と隣村との境目定証文や、数は少ないが、材木流通に関する史料も数点残っている。一方で、延宝年間以降に黒田三ケ村と灰屋村との間で起こった山論に関する史料は、後に挙げる史料集には数多く掲載されているが、この「灰屋村文書」中には見当たらない。

山国・黒田地域（江戸時代の下・鳥居・塔・辻・中江・比賀江・大野・井戸・小塩・下黒田・黒田宮・上黒田村）に伝わった中世から近世にかけての史料については、野田只夫編『丹波國山國荘史料』（史籍刊行会、一九五八年）、同編『丹波國黒田村史料』（黒田自治会村誌編纂委員会、一九六六年）にまとめられている。これらの史料をもとに、同志社大学人文科学研究所編『林業村落の史的研究』（ミネルヴァ書房、一九六七年）、藤田叔民『近世木材流通史の研究』（新生社、一九七三年）といった研究成果が出されている。また、近年では坂田聡氏を中心とした調査グループにより、さらに山国・黒田地域の史料調査が進み、その成果として坂田聡編『禁裏領山国荘』（高志書院、二〇〇九年）、坂田聡『家と村社会の成立』（高志書院、二〇一一年）、坂田聡・吉岡拓『民衆と天皇』（高志書院、二〇一四年）などが出版されている。しかし、灰屋村については『丹波國山國荘史料』や『丹波國黒田村史料』に関連史料が収録されることはあっても、同地に伝来した史料が紹介されることはなく、それゆえ、先に挙げた研究成果でも大きく取り上げられることはなかった。

「灰屋村文書」は、点数は多くはないが、これまで研究対象とされることがなかった灰屋村の貢納や山林売買、材木取引等の実態を探ることができる、興味深い史料であるといえよう。

各文書の内容

ここでは、「灰屋村文書」の中から、中世末期・近世初期の史料や、灰屋村の主な産業である林業に関わる史料を中心に紹介する。

［1］―［4］は、「灰屋村文書」の中でも最も早い時期の史料である。内容は、［1］―［3］が売券、［4］が山割に関する史料となっている。

［5］―［11］は材木流通に関する史料である。山国・黒田地域では、木材を筏に組んで川に流す「筏流し」という方法によって材木を移出していた。

［5］は、灰屋村が山国・黒田地域の「拾ケ村」と同様、材木商売に関わることについて取り決めた証文の控である。「拾ケ村」とは、下・鳥居・塔・辻・中江・比賀江・大野・井戸・小塩・下黒田・黒田宮・上黒田村の二ケ村を指すが、下黒田・黒田宮・上黒田の三ケ村を一と数えている。

本文冒頭にある「丹波国五拾弐ケ村と城州嵯峨・梅津・桂材木屋と先年向論之節」とあるのは、享保一九（一七三四）年から寛保二（一七四二）年にかけて丹波国五二ケ村の材木取引に関わる人々（丹波山方）が嵯峨・梅津・桂に出店を設置しようとして同地の材木商人と訴訟になった一件（前掲『近世材木流通史の研究』三五五―三七二ページ）を指すと考えられる。［5］の本文によれば、訴訟時には丹波国五二ケ村の材木商人の中に灰屋村は加わらず、材木商売も行わなかったようだが、この宝暦九（一七五九）年になって「拾ケ村」と同様に材木商売を行うことになったという。

［5］と同じ時期に作成された［6］では、「桂惣兵衛見せ」の諸入用を灰屋村も負担することについて書かれている。この「桂惣兵衛見せ」とは、丹波山方が桂に設置した出店・丹波屋惣兵衛店のことを指す。

［7］、［8］は筏株に関する史料である。筏株（筏判株）とは木材の移出および産地での立木売買を行うことのできる権利のことで、［7］は灰屋村の儀兵衛が「十ケ村」（史料［5］の「拾ケ村」に同じ）の筏証人仲間に入るにあたって差出した銀一枚の領収書である。［8］は山国筏株仲間の帳面に押印した灰屋村儀兵衛の印鑑を灰屋村全体の印鑑として取扱う旨を記した証文である。また筏株仲間加入金の銀一枚は、儀兵衛個人で出したものではなく、灰屋村中から出し合わせたと記されている。

［9］は筏場となる川原の売渡証文である。筏流しによって木材を移出する際には、このような筏組み場が必要となった（前掲『近世材木流通史の研究』二〇六ページ）。

［10］は筏鼻割銀（筏移出数に対する負担銀）の領収書である。筏流しは旧暦の八月一六日から翌年の四月八日までの時期に行われた（前掲『近世木材流通史の研究』一五八ページ）。本史料では前年冬分および当年春分の筏鼻割銀が灰屋村の儀兵衛から差出されている。

［11］は木場借財金の領収書である。幕末期には、京都市中に薩州木場、備前木場、長州木場といった材木取引の場が設けられたことが分かっており、特に薩州木場は丹波山方の出資によって運営されたことが明らかにされているが（前掲『近世材木流通史の研究』三九六ページ）、この史料に見られる木場が先の三ケ所のいずれかを指すのか、または全く別のものを指すのかは不明である。

史料中の喜平次および源助は灰屋村の筏株の所有者であると考えられる。源助という人物は「灰屋村文書」の旧蔵者である和田家の当主と考えられるが、源助の名は「灰屋村文書」の中では明治二年が初出であり、本史料で用いられている貨幣の単位や干支と併せて考えると、本史料は明治四年のものであると推測される。なお、「灰屋村文書」中には［11］のほかに「木場掛り金」の明治五年の受取書が二通残っている（整理番号41、51）。

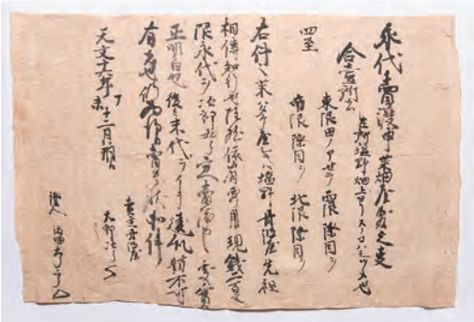
史料翻刻

［凡例］

史料翻刻に際しては、次の方針に従った。

- 旧字体や変体仮名は通行字体に改めた。ただし、「江」、「与」、「而」、「者」、「茂」や、「ゟ」は原文のままとした。
- 判読できない文字は□とした。
- 適宜読点や並列点を補った。
- 改行箇所は原文とは一致しない。

[1] 整理番号179



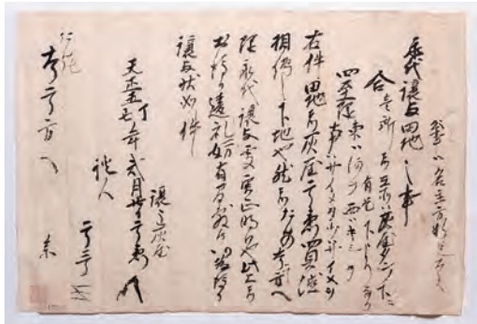
永代売渡申菜畑屋敷之事
合壱所者　在所ハ塩野畑上ヨリスノコハシツメ也
四至　東限田ノアせヲ　西限際目ヲ
南限際目ヲ　北限際目ヲ
右件之菜ハタケ屋シキハ塩野丹波屋先祖相伝知行也、雖然依有要用現銭二百文二限永代ヲ次郎五郎方へ売渡申候処実正明白也、後々末代ニヲイテ違乱妨不可有者也、仍為後日売券状如件
売主丹波屋
天文十六年丁未十二月朔日　太郎次郎（略押）
証人
内田太郎二郎（略押）

[2] 整理番号180

（端裏書）
「たんの下文壱」

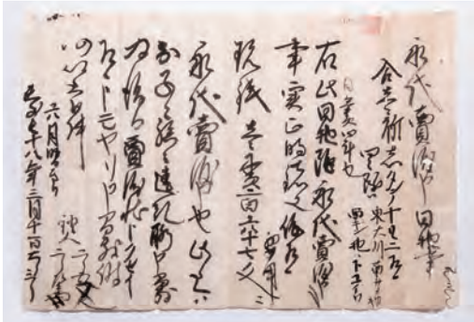
公事ハ名主方料足百文
永代譲与田地之事
合壱所者　在所ハ灰屋タンノ下ニ
有是下よりなり
四至限　東ハ河ヲ　西ハキシヲ
南ハサイメヲ　北ハサイメヲ
右件田地者灰屋二郎右衛門買徳相伝之下地也、然者たんの太郎二郎方へ限永代譲与処実正明白也、此上者於後日違乱妨有間敷候、仍為後日譲与状如件
譲主灰屋
天正五丁丑年弐月廿日　二郎右衛門（略押）
証人
二郎三郎　（略押）
たんの
太郎二郎方へ　参

[3] 整理番号181



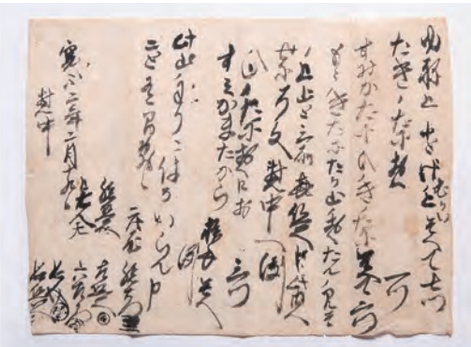
（端裏書）
「太郎三郎」

永代売渡申田地事
合壱所者　タンノ十□二有
四々限ハ　東大川　南サメカキ
西キシ　北ハ下コイワ
同年貢四斗也
右此田地限永代売渡申事実正明緒也、依有要用現銭壱貫二百六十七文二永代売渡申也、此上ハ於子々孫々違乱聊申間敷、為後日売渡状トクセイ有トモヤリ申間敷候、仍以上如件
六月晦日きり　証人　二郎五郎　（略押）
二郎左衛門（略押）
慶長十八年三月十一日　太郎三郎



[4] 整理番号183

（前欠カ）
ゆね上山とげむかいをそへて　七つ
たきノたにおく　一つ
すみかたにのノきノたにそへて　二つ
もゝノきたにたか山ノおくたんノみそノ上上と三所
喜兵へ分、此内へせに百文惣中へ渡し
ひノたにおく口お　三つ
すミかまたから拾匁そへ渡し
此山ノわり二付而いらん申こと有間敷候
庄屋孫右衛門（略押）
孫兵衛（印）　左兵衛（印）
□人（略押）　六左衛門（印）
長介（印）
長兵衛（印）
寛永二年二月十九日
惣中



[5] 整理番号205

此通り山国江出し申候
一丹波国五拾弐ヶ村と城州嵯峨・梅津・桂材木屋と先年向論之節、私共村方江も連中ニ差入候様ニ被仰聞候得共、其砌ハ村方故障之義有之、右之連中不抱之候義残念ニ存候、仍之材木商売も不仕候処、拾ヶ村一同之儀申入候処、早速御得心仲間入仕候段、忝仕合ニ存候、此後材木ニ相抱り候諸入用割賦等、拾ヶ村江准シ相請可申候、此外郷法之通り相守可申候
一川筋損シ候節、川作り人足割合ニ指遣シ可申候
一材木屋と差支有之候方江者売買一切仕間敷候
一近辺山々江入買木之義、郷中御差構有之候場所江者立入申間敷候
一郷中ゟ御構有之商人江者山木売申間敷候
右之外、拾ヶ村古法之通諸入用割賦、向論一同御相談之通り、違乱申間敷候、何れ茂郷中ニ相准シ売買可仕候、為念仍而如件
宝暦九年卯十二月日　丹州桑田郡灰屋村
山国黒田惣代　新之丞判
茂兵衛殿　儀兵衛判

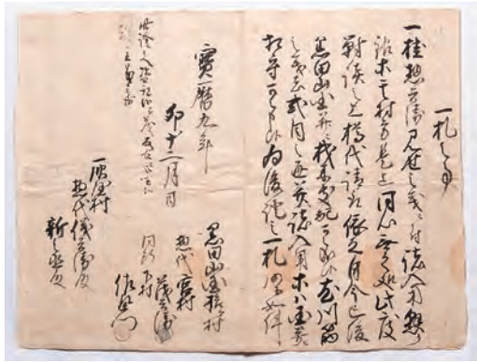
[6] 整理番号204

（端裏書）
「筏証文」

一札之事
一桂惣兵衛見せ之義ニ付、諸入用懸り銀等其村方是迄同心無之処、此度対談之上樽代請取、依之自今已後黒田山国并ニ材木支配可被成候、尤川筋之義者、式目之通并ニ諸入用等ハ国并ニ相守可被申候、為後証之一札仍而如件

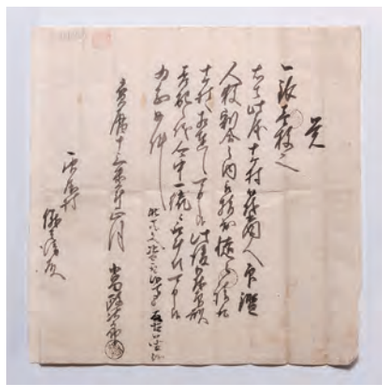
宝暦九年　　黒田山国拾ヶ村
卯ノ十二月日　　惣代宮村
（後筆）　　茂兵衛　（印）
「此証文盗取候而茂反古ニ御座候」同断下村
「□（抹消）主義兵衛」　　佐左衛門　（印）
灰屋村
惣代儀兵衛殿
新之丞殿

（裏書）
「此証文万一盗取れ候而も支配致候処証古也」



[7] 整理番号206

覚
一銀壱枚也
右者此度十ヶ村筏商人印鑑人数割合之内被指出、慥ニ請取十ヶ村へ相達し可申候、此後筏印形差配之儀郷中一統ニ取計ひ可申候、為念如件
（後筆）「此証文盗取候ても反古御座候」
宝暦十三未年正月　　小畠政次郎（印）
灰屋村
儀兵衛殿

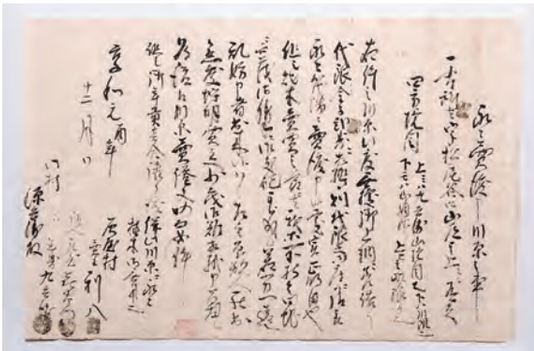


[8] 整理番号208

筏枕名前之事
一当村桴冠之儀者、儀兵衛名前亀山印鑑差上申、則銀壱枚村中ゟ出合せ山国中間帳面ニ印形印シ罷有候、然ル上者儀兵衛名前判形之儀、惣印ニ而御座候、則印形此方ニ預り御座候、御入用之節ハ何時ニ而茂相遣シ可申候、為後証之印形名前預り手形依而如件
安永四年未正月日　　灰屋村
儀兵衛（印）
此通証文村へ出し申候
御村中
参
但し筏枕御座候間者高割枕懸り前年出之申候、以上

[9] 整理番号199

永々売渡申川原之事
一壱所者　字松尾谷口山道之上ミニ有之
四方境目　上ミハ九兵衛山境目也　下ハ川限也
下モハ山道限り　上ミ者畝限り也
右件之川原、此度無拠御上納ニ差詰り、代銀金子弐歩ニ相極メ、則代銀当座ニ請取永々筏場ニ売渡申候処実正明白也、但シ材木売買之節ニ者我等所持之田地ニ而茂御勝手ニ御支配可被成候、若万一違乱妨申者出来候ハヽ、左之印形人罷出、急度埒明、買主へ少茂御難相掛申間敷候、為後日川原売証文仍而如件
但し御年貢壱合譲り渡、併此川原ニ永々植木御無用也
享和元酉年
十二月日　　灰屋村
売主利八　（印）
請人庄屋喜右衛門（印）
同　年寄九兵衛　（印）
同村
源兵衛殿



[10] 整理番号60

覚
一銀三拾壱匁五分
右ハ巳冬川・午春川筏鼻わり慥ニ受取申候
午十二月　　小畠丹次（花押）
灰や儀兵衛殿

[11] 整理番号59

覚
一金四拾八両也　喜平次様ゟ
一同三拾四両也　源助様ゟ
〆八拾弐両也
右者木場借財金割受之内江慥ニ受納如件
未十二月大晦日　　宮村嘉左衛門
組合中
灰屋村
御役中

佛教大学附属図書館の事業活動報告

2017～2018年度前半期

2017年度

4月　学術情報検索BIRDの利用説明会を開催（～2017年12月）。
4～3月　企画展示（図書館1階）　日本および海外の絵本と、佛教大学教育後援会の援助金による語学教材を随時更新しながら展示。
7月　エルゼビアジャパン社による「Scopus」（2017年度新規導入）講習会を開催。
9月　京都府立図書館との相互貸借の連携（試行）を開始。
10月　図書館報『常照』第64号を発行。
1月　図書館書架収容率および開館時間検討にかかる利用者数調査を実施し、図書館委員会に報告。
佛教大学教育後援会の援助金により語学教材492冊を購入。Cambridge 各種Readers教材、英語で読む世界の文学全集セット・伝記セット・図鑑セットなど。
3月　図書館書庫（別館）設置および紫野図書館排架整備を実施。

中央展示テーマ（2017年4月～2018年3月）

4月　新収資料展
5月　京のガイドマップ
6月　京都と火災
7月　幕末維新期の京都
8月　四条河原
9月　重陽の節句
10月　月見
11～12月　二条城
1月　明治150年
2月　朝鮮本
3月　新収資料展（仏書編）

紫野図書館4階に絵本コーナーを整備

2018年度

4月　学術情報検索BIRDの利用説明会を開催（～2018年12月）。
4月～7月　京都府立図書館との相互貸借の連携（本格実施）を開始。
8月　企画展示（図書館1階）　日本および海外の絵本と、佛教大学教育後援会の援助金による語学教材を随時更新しながら展示。
エルゼビアジャパン社による「Scopus」（2017年度新規導入）講習会を開催。
プロクエスト社による「RefWorks」、「ProQuest Central」の講習会を開催。
紫野図書館4階に絵本コーナーを整備。

中央展示テーマ（2018年4月～9月）

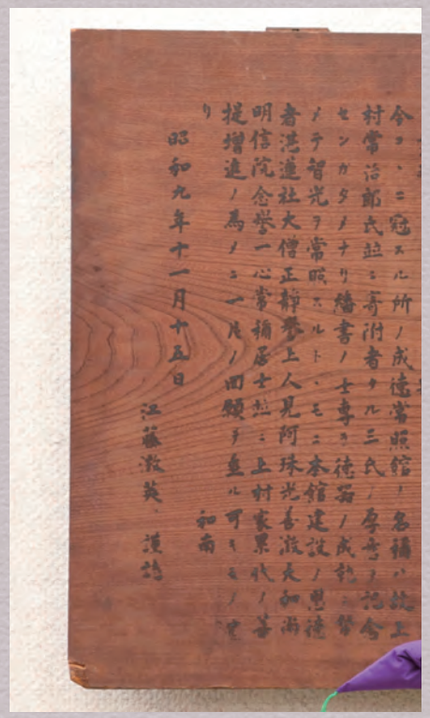
4月　新収資料展（京都編）
4月　法然上人絵伝
5月　華頂御殿勘定所文書
6月　祇園祭
7月　清代官文書
8月　城絵図
9月

企画展示（図書館1階）
日本および海外の絵本と語学教材を展示

佛教大学附属図書館の沿革と「成徳常照館」の由来

佛教大学附属図書館は、佛教大学の前身佛教専門学校があった京都市左京区鹿ヶ谷の地から、現在の京都市北区紫野に移転した1934（昭和9）年11月23日に木造2階建の閲覧室と、鉄筋コンクリート3階建の書庫を竣工落成しました。この図書館建設にあたっては、佛教専門学校初代校長である土川善澂師（浄土宗大本山知恩寺68世住職）に深く帰依された篤志家上村常治郎氏のご遺族から多額の寄付をいただき、完成することができました。その後、1963（昭和38）年9月に開学50周年を記念して閲覧室、書庫などが増築され、1972（昭和47）年4月には、開学60周年記念事業として地上5階地下1階建で、研究室を配置した複合図書館棟が完成しました。現在の図書館は、開学80周年の記念事業として、同窓会、鷹陵同窓会などの卒業生、在学生ならびに保護者、浄土宗寺院をはじめとした、本学有縁の方々からの多大な寄付によって、1995（平成7）年1月に着工し1997（平成9）年4月に竣工したものです。地上5階地下2階建で100万冊を収蔵することができます。

佛教大学附属図書館の建物は、「佛教専門學校附属圖書館成徳常照館之記」にある「今ココニ冠スル所ノ成徳常照館ノ名稱ハ（中略）繙書ノ士専ラ徳器ノ成就ニ努メテ智光ヲ常照スル」から「成徳常照館」と名づけられ、書物をひもとく者が努力して、立派な人格者となり、智慧の光をいつも照らすようにという願いが込められています。この木額は佛教専門学校第7代校長江藤澂英師（浄土宗大本山善導寺61世住職）によって撰述されたもので、現在は図書館1階に掲げられています。また、同じく1階に設置されている浄土宗総本山知恩院にある八角形の経蔵「転輪蔵」（略して輪蔵）の縮小複製は、1998（平成10）年5月、図書館開館1周年を記念して、佛教大学同窓会、鷹陵同窓会、通信教育部学友会、教育振興会から寄附されました。輪蔵は、1回転させることによって、一切経を読誦したことと同じ功徳を得られるといわれています。



「成徳常照館」の由来に関する記述（図書館１階の木額より）

後記

佛教大学附属図書館報『常照』第65号をお届けします。表紙の風景は、2016年度に竣工した礼拝堂から真正面に位置する図書館です。並木道から一直線に見える成徳常照館。館内から並木道の先にのぞむ礼拝堂。四季折々、移り変わるその風景はいつも美しい。

佛教大学附属図書館報『常照』第65号

発行日　平成30年10月23日
発行者　佛教大学附属図書館長　松田和信
発行所　京都市北区紫野北花ノ坊町96
佛教大学附属図書館
制　作　株式会社栄美通信